

「白内障」とは？

水晶体に混濁が起こる疾患の総称です。

水晶体が混濁すると、光の透過が障害され、視力低下などの症状が現れます(図右)。昔から俗に「しろそこひ」と呼ばれています。

水晶体とは？

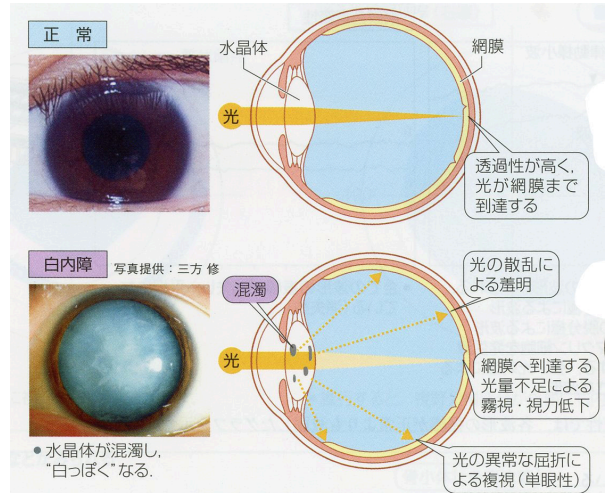
水晶体は、直径約9~10mm、前後径約4mmの凸レンズ型をした透明な組織です。光を透過させるとともに屈折させる働きがあります。また、毛様体筋の収縮・弛緩により、その厚みが変わることによって屈折率が変化し、遠近調節が行うことができます。

「白内障」は、様々な原因により起こりますが、加齢にともなうものが最も多く、その他の原因として、先天的なもの(後述)・外傷、アトピーによるもの・薬剤、放射線によるもの・そして他の目の病気(炎症)に続いて起こるものなどが挙げられます。(図右)

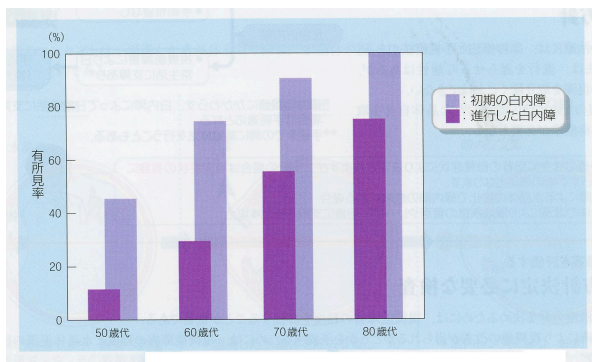
「加齢白内障」について：

中年以降に加齢とともに有病率は上昇します。早い人では40代から、80代では程度の差はありますが、すべての人に認められます(図下)。

加齢以外に、水晶体を混濁される原因が特定できない場合には「加齢白内障」と診断されます。



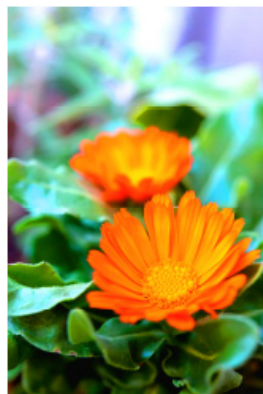
| 分類 | 主な原因 | 解説 |
|------------|---|--|
| 加齢白内障 | ●加齢(喫煙、紫外線が危険因子) | ●白内障の中で最多である。 ●70歳以上では5人に4人以上で白内障が認められる。 |
| 併発白内障 | ●ぶどう膜炎 ●緑内障 ●眼内腫瘍 ●網膜疾患(網膜剥離など) | ●他の眼疾患に伴って発症する。 ●水晶体を栄養する房水や硝子体の変化により、代謝障害をきたす。 |
| 全身疾患に伴う白内障 | ●アトピー性皮膚炎 | ●若年者の白内障の原因として頻度が高い。 ●網膜剥離の合併に注意する。 |
| | ●糖尿病 | ●糖代謝障害が原因とされる。 ●糖尿病網膜症、血管新生緑内障の合併に注意する。 |
| 薬物性白内障 | ●ステロイド長期投与(全身投与) | ●発症すると進行が早く、数ヵ月~1年程度で手術が必要になる場合もある。 |
| 外傷性白内障 | ●穿孔性眼外傷 ●眼球打撲 | ●穿孔性眼外傷では、水晶体の直接的な損傷により急速に進行する。 ●鈍的な打撲では、受傷後しばらく経過してから発症する。 |
| その他 | ●電離放射線 | ●X線などの放射線曝露の晩期障害として生じる(確定的影響)。 |
| | ●赤外線 | ●熱エネルギーによる障害である。 ●ガラス工白内障ともよばれる。 |
| 先天性 | ●母子感染(風疹、トキソプラズマ) ●代謝異常(ホモシスチン尿症、ガラクトース血症) ●Down症候群 ●Alport症候群 ●Marfan症候群 | ●種々の先天的原因により、出生時~乳幼児期に発症するものである。 ●視覚の発達時期であるため、形態覚遮断弱視の予防を念頭に手術適応を検討する。 |



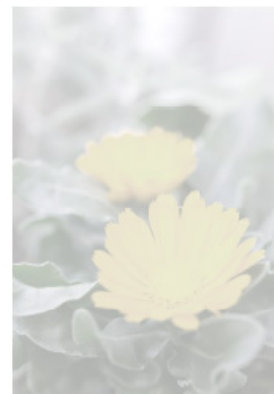
症状

水晶体が濁り始めると、水晶体で光が散乱するために、ものがかすんで見える(霧視)、まぶしく見える(羞明)、ものが二重、三重に見える(複視)、見えづらくなる(視力低下)などの症状が現れ、眼鏡でも矯正できなくなります。(図右)

正常な見え方



白内障の見え方



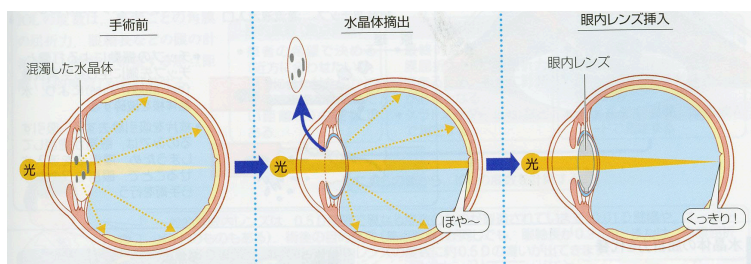
治療

ごく初期の白内障は点眼薬で進行を遅らせることができる場合がありますが、濁った水晶体をもとに戻すことはできません。視機能を回復できる治療は手術療法のみです。

白内障手術について (図右)

手術の概要は混濁した水晶体を取り除き、代わりの「眼内レンズ」(*)で代替えるものです。

手術は局所麻酔で顕微鏡を使って行われます。約2mmの角膜切開創から超音波で振動する吸引管を挿入し灌流しながら水晶体を吸い出し(水晶体乳化吸引術)残した薄い膜(水晶体嚢)の中に「眼内レンズ」を挿入する方法が主に行われています。



*: 「眼内レンズ」とは?

眼内レンズは、人工の水晶体としての屈折力を代替えます。

眼内レンズには、種々の機能が付加されたものがあります。

これまでは主に単焦点の球面眼内レンズが使われていましたが、多焦点眼内レンズの他に、着色レンズ(青色光を抑える)、乱視矯正のために非球面レンズも開発されています。

多焦点レンズは焦点が合う距離が1つの従来の単焦点眼内レンズに対し、近方・遠方に焦点が合うレンズです。

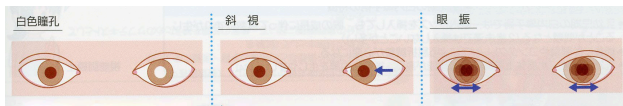
(図右)



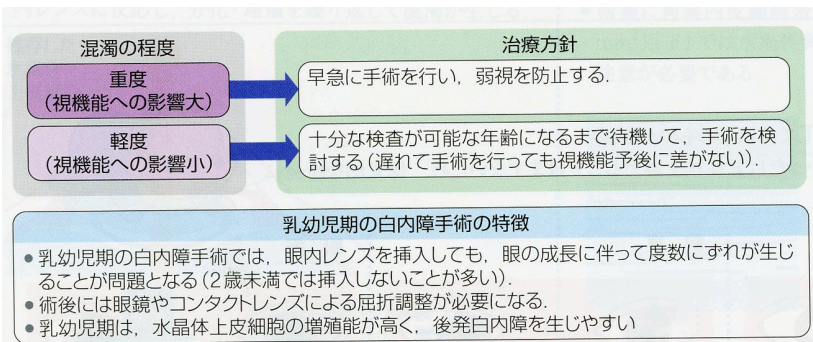
先天性白内障 出生児から幼少期に水晶体が混濁する病気です。

原因には、風疹を代表とする母子感染(胎内感染)や代謝異常、全身的な先天異常があります。両眼性が多いが、片眼性もあります。視機能が発達時期であり、弱視を防止するためには早期の診断・治療が必要です。

症状・所見: 乳幼児では、自覚症状として視力障害を訴えることはなく、「黒く見える瞳孔部分が白色調を帯びる」(図:左)、「片方の目の視線がずれているように見える」(図:中)、「目が揺れる」(図:右)などの他覚的な所見に気づくことが重要です。



治療指針:



乳幼児期は、眼球が形態学的にも成長し、白内障により光刺激が遮られると正常な視機能が獲得できず弱視となる可能性があります。治療は手術が基本ですが、混濁の程度や年齢などを考慮して手術適応・や手術時期が考慮されます。また手術だけでなく術後の視機能訓練も重要です。(図左)

図は、「病気がみえる vol.12 眼科」<MEDIC MEDIA>、「眼科先端医療研究会」ホームページから引用しました。

この「診療所だより」や診療についての御意見・御要望などをお気軽にお寄せ下さい。これからの参考にさせていただきます。

編集・発行: 勝山諄亮

勝山診療所

〒639-2216 奈良県御所市343番地の4 (御国通り2丁目)
電話: 0745-65-2631